

パレスチナ問題から考える
「人間の姿」と「日本の立ち位置」

桃井和馬 (恵泉女学園大学人文学部教授)

パレスチナ問題が2023年10月7日以降、状況を一気に悪化させたことで、皆様も心を痛めておられるのではないのでしょうか。関連情報があふれているため、今回は既報報道とは異なる視点からこの問題を考えてみましょう。

パレスチナは地球上で最も重要度の高い「要衝」のひとつです。そのことを理解するために地図を開いてみてください。広大なアフリカ大陸とアラビア半島、その先に広がる全ユーラシア大陸が、シナイ半島とそれに続くパレスチナの「歩いて渡れる回廊」だけで唯一結ばれているのです。

人類史においてもこの場所は重要でした。およそ700万年前のアフリカ西部で二足歩行を始めた猿人は、そのずっと後、ネアンデルタール人として推定30万年前に、この回廊を辿って世界に拡散しました。そしておよそ20万年前に、私たちの直接の祖先ホモ・サピエンスもこの道を歩いて世界へ向かったのです。驚くべきことは5万5千年前に、現在のイスラエル北部ガリラヤ湖周辺で、日々出会う距離で生活していたことが確認されていることです。

次に注目したいのは、モーセ五書（民数記、申命記）に出てくる「王の道」と「葦の海の道」です。現在のシリアからダマスカスを通り、パレスチナを抜け、エジプトに至る旧約聖書の時代から知られる2つの街道です。周囲の文明大国、アッシリア、バビロニア、エジプトなどは、この街道を時には交易のために、時には戦いのために往き来していたのです。

それだけではありません。レバノン山脈を水源とした水がガリラヤ湖に注ぎ込み、ヨルダン川や無数のワジ（雨期に出現する川で、地下に水脈を持つ）を通して周囲に水を注ぎ続けました。またエルサレム神殿を作った「レバノン杉」も、当時は十分に茂っていたのです。文字通り、かつてカナンと呼ばれたパレスチナは「乳と蜜の流れる土地」=約束の

地だったのです。

ローマ帝国がこの場所に執着理由も、地政学的な見地から理解できません。肥沃なナイルデルタに位置し、ギリシャ語聖書を翻訳したヘレニズム文化の中核都市アレキサンドリアや、かつてハンニバル將軍の地として地中海貿易の中心を担ったカルタゴなどの土地を結ぶ環「地中海」支配を効率的に進めるためには、パレスチナを支配下に置くことが絶対条件だったのです。

現在のパレスチナ問題を宗教問題と捉えると本質は理解できません。また今回の戦いがアラブ圏からの見方である「『ナクバ（大厄災）』の再来」と捉えると核心を見誤ります。

ガザを支配するハマスは、イスラエルの「殲滅」を行動原理とする武装組織です。対するイスラエルも、これまで続けたパレスチナでの「ユダヤ人入植地」拡大は完全に国連決議違反の侵略行為で、民間人が殺害されることも容認する現在のガザ攻撃は明らかな「国際人道法」違反です。つまり、どちらかが悪いのではなく、どちらも悪いのです。その陰で、ガザの一般の人々の血が流されていることこそが問題なのです。

さて、こうした事態を前に、日本は何ができるのでしょうか？ パレスチナ分割決議は 1947 年 11 月の国連決議によって、賛成 33 カ国、反対 13 カ国、棄権 10 カ国の決議を受け、採択されました。これにより翌年の 5 月 14 日、イスラエルは建国しました。（翌 15 日、アラブ連盟 5 カ国は 15 万人の兵力と共にイスラエルに軍事侵攻。対するイスラエルは 3 万人の兵士で応戦したのですが、最終的にイスラエルが 5 倍の兵力に対して勝利し、その結果過激、かつ過剰防衛したことで大量のパレスチナ難民が生まれたと考えられています）

しかし、第二次世界大戦後、GHQ の統治下で国連に加盟できなかった日本は、幸いなことに、この決議にまったく関与していません。つまりパレスチナ問題において完全な中立の立場を取り得るのです。

こうした歴史的な前提を前に、日本のやるべきことは明らかでしょう。関係する当事者たちに積極的に呼びかけた上で、パレスチナにおいて生命の危機に直面する一般の人々への惜しみない支援の実施なのです。